

読

知覚への独創的探究 今も

2年に1度の芸術祭「神戸ビエンナーレ」が開催中だ。神戸市内の4か所の会場を中心に、9000点余りの作品を紹介する。注目されるのが兵庫県立美術館の「REFLEXIONEN

「ひかり いろ かたち」展だ。1950年代に結成された前衛美術集団「具体美術協会(具体)」「(日本)と、「グループ・ゼロ(ゼロ)」「(ドイツ)、その継承者らに焦点を当てた。
(木村未来)



ユリウス・シュミターデルの「RGBI-aster」。何も無い壁を撮影すると、画面に色が浮かび上がる(Bleed-through)。ZERO展より。2010年 デュッセルドルフ

阪神間の美術家らが集い、54年に誕生した「具体」は、リーダー、吉原治良の「人のまねをするな」「今までにないものをつくれ」という指導のもと、独創的な作品を次々に生んだ。

足を使って描いたり、絵の具の入った瓶を投げつけたりする手法は、時に「体当たり芸術」と嘲笑されたが、海外の評論家からは高い評価を受けた。72年の解散後も注目され、2013年には米・グッゲンハイム美術館で大規模な展覧会が予定されている。

一方、57年、西独・デュッセルドルフで設立された「ゼロ」が目指したのは「純粹抽象による知覚の探究だった。ネオンサインなどを使い、即時には具体的イメージを浮かべにくいモチーフを提示して、人間の本能的な部分を刺激する、環境芸術などを積極的に制作した。

65年、ゼロはオランダ・アムステルダム市立美術館で開

いた展覧会に具体を招待、吉原が作品展示のため現地に赴いたことから交流が始まり、以降、作家同士のやりとりが続いた。

本展では具体の作品として吉原の「黒地に赤い円」のほか、田中敦子や嶋本昭三らの作品9点を展示。

ゼロからは創立者、オットー・ビーネやハインツ・マツクラの作品と、その精神を受

元永定正さんの遺作掲げる

会場には具体の中心メンバーで、今月3日亡くなった元永定正さんの「ながれたかたちとかたちのかたち」が掲げられている。

昨年末から今年にかけて制作した小品83点を壁面に不規則に並べた作品で、縦横は数センチに及ぶ。

キャンバスにアクリル絵の具を使って描いた1点1点は、絵の具を流してにじませたり、円や四角形を鮮やかな色彩で描いたり、それぞれにおもむきが異なっている。



83点のうち1点「ながれたなかで」(2011年)

昨年来、入退院を繰り返す中で、描きためていた作品群

け継ぐ84年生まれの若手作家、ユリウス・シュミターデルの作品を紹介する。シュミターデルの「RGBI-aster」は、ストロボライトやカラーのフィルターを通した光を照射した壁そのものが作品だ。

実際に目に見えるのは、たった1色の光だが、鑑賞者が携帯カメラなどで壁を撮影すると、その画面には様々な色のグラデーションが出現するという不思議な作品で、身近にある器具や装置を使って、驚きを生み出す手法は、まさにゼロそのものと言える。11月23日まで。

で、館からの出品依頼に「実は」と明かし、1000点を目標にしていた。亡くなる直前まで学芸員と打ち合わせをしていたという。

館南側の大階段下には、建築家の安藤忠雄さんからの依頼で制作した彫刻作品「きいろとぶるう」が設置されたばかり。先月21日の披露式への出席を望んでいたが、かなわなかった。

「アイデアはまだまだあるで」「早く家に帰って描きたいねん」。病床でもそんな風に語り、最後の最後まで、創作に意欲を燃やしていた。